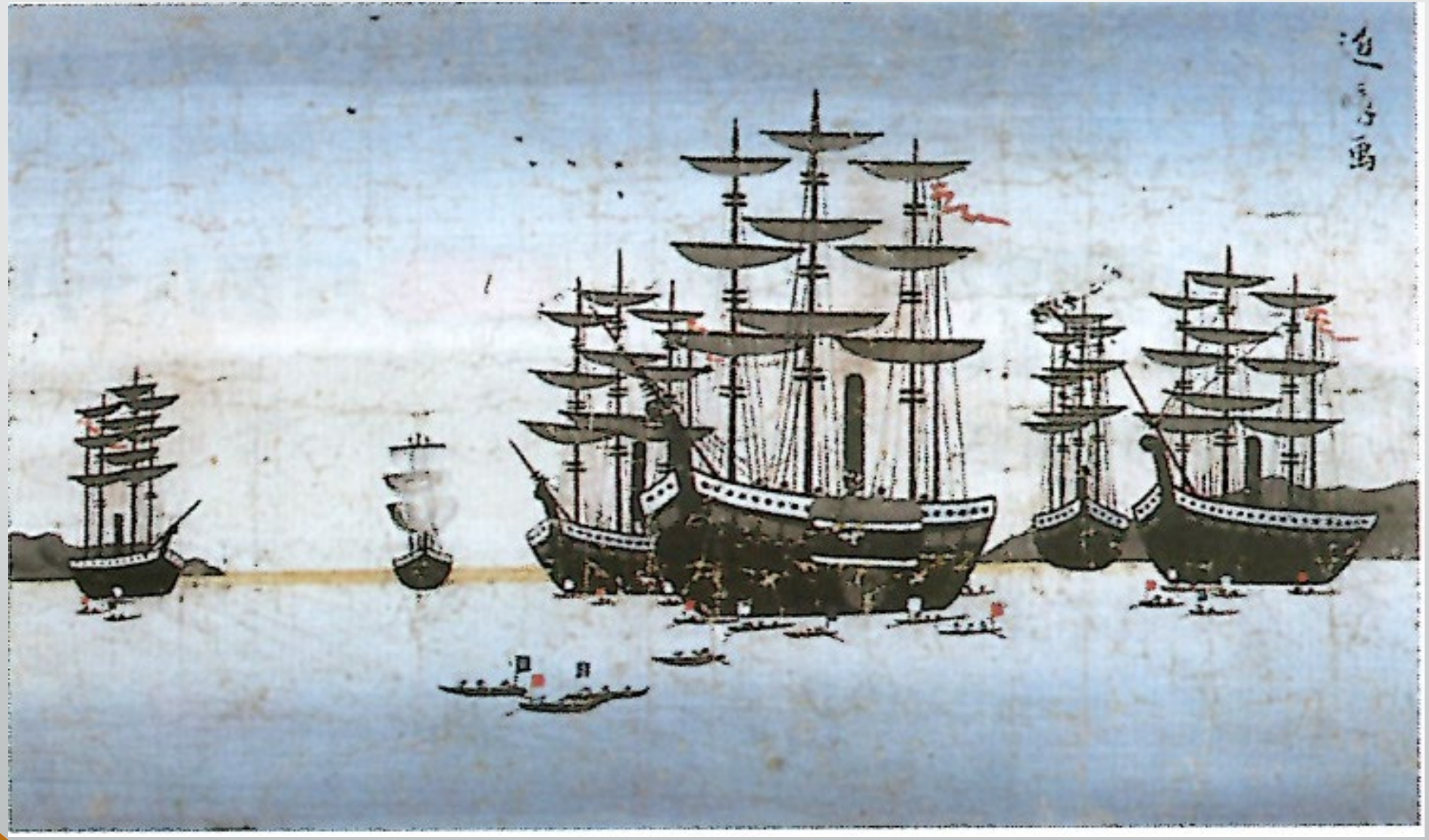
新・日本の近代史（第2回）

開港と貿易

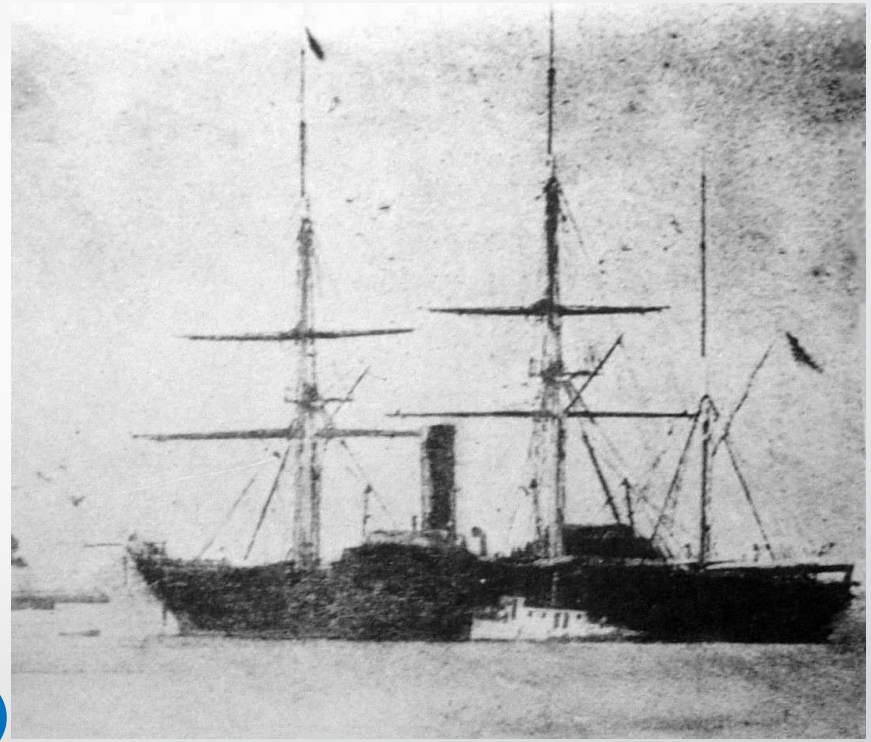
ペリー艦隊の来訪と日本の対応



ペリー艦隊の来訪

ペリー艦隊の四隻の来港

1853年7月8日（嘉永6年6月3日）
浦賀沖に停泊



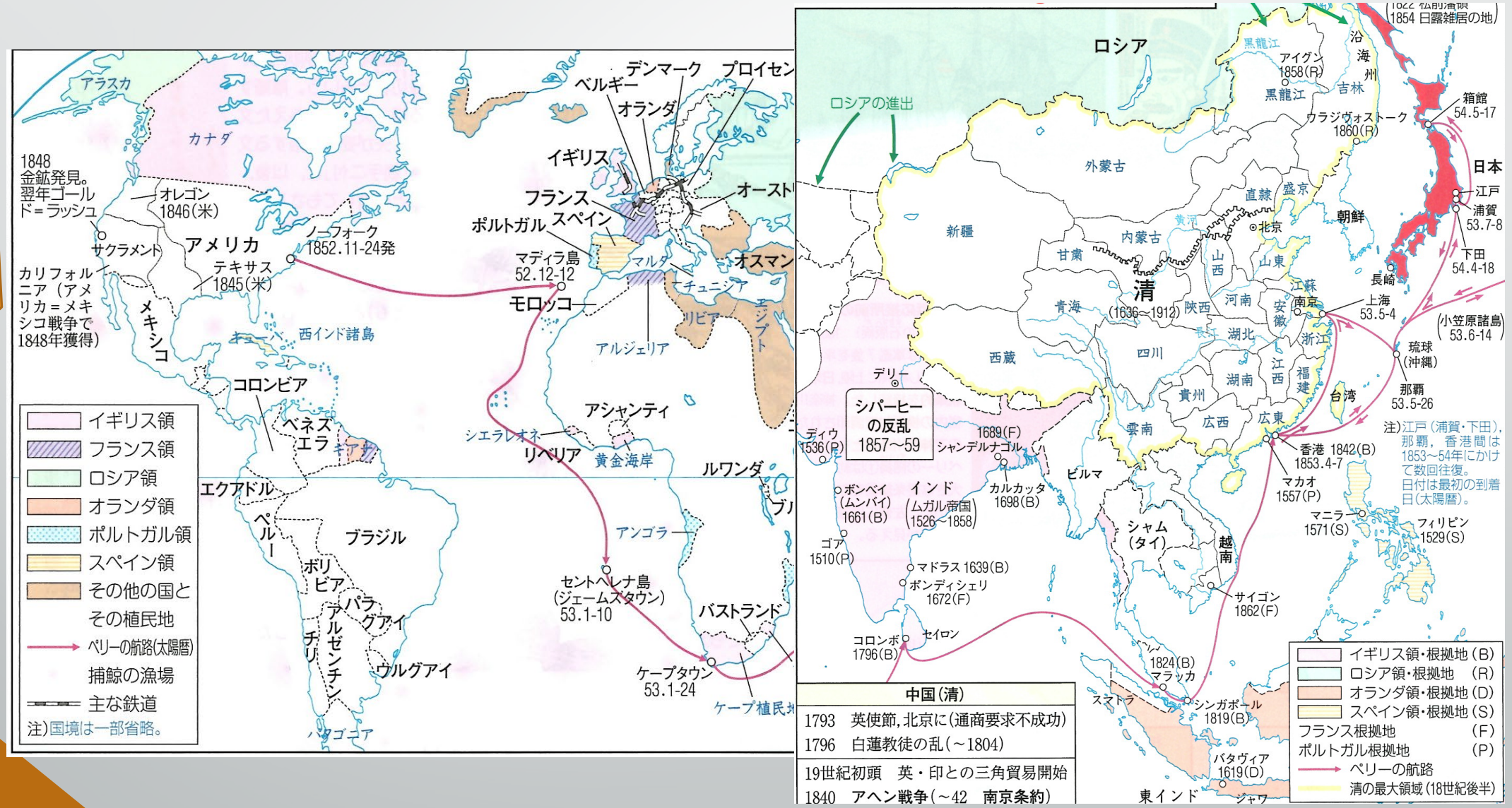
- 2隻の蒸気船
  （船も装備も世界最高レベル）
- 2隻の帆船

旗艦サスケナハ号2450ｔ
ちなみに千石船150ｔ

1853年頃の世界とペリーの航路

合衆国の太平洋岸到達
カリフォルニア獲得
1848年

ゴールドラッシュ
1849年



マシュー＝ペリー（1794～1858）

①「タカ派」の軍人「帝国主義者」

→メキシコ(米墨)戦争などの司令官

②「蒸気船の父」

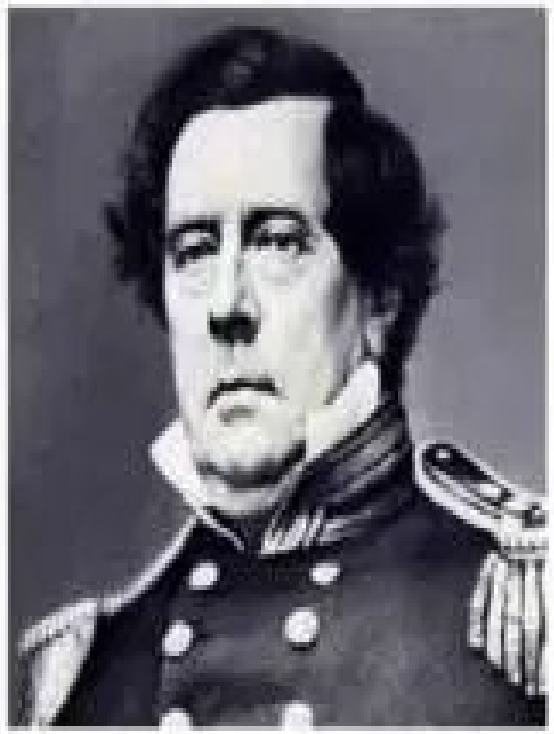
→アメリカ海軍の近代化を進める

→海軍の縮小を防ぐ役割も

③琉球・小笠原の領有を検討

→1854年琉米和親条約を強要

④台湾の領有も具申。



マシュー・C・ペリー

”Ｉspeak　Dutch！”

～「砲艦外交」と「万国公法」～

ペリーの手法「大臣クラスにしか会わない！」

国際法＝「一国の元首である大統領の使節」

→国際法(「万国公法」)に基づく対応を要求

砲艦外交＝江戸湾内に蒸気船と測量船を侵入させ測量

奉行所側「Ｉspeak Dutch！私はオランダ語が話せる」

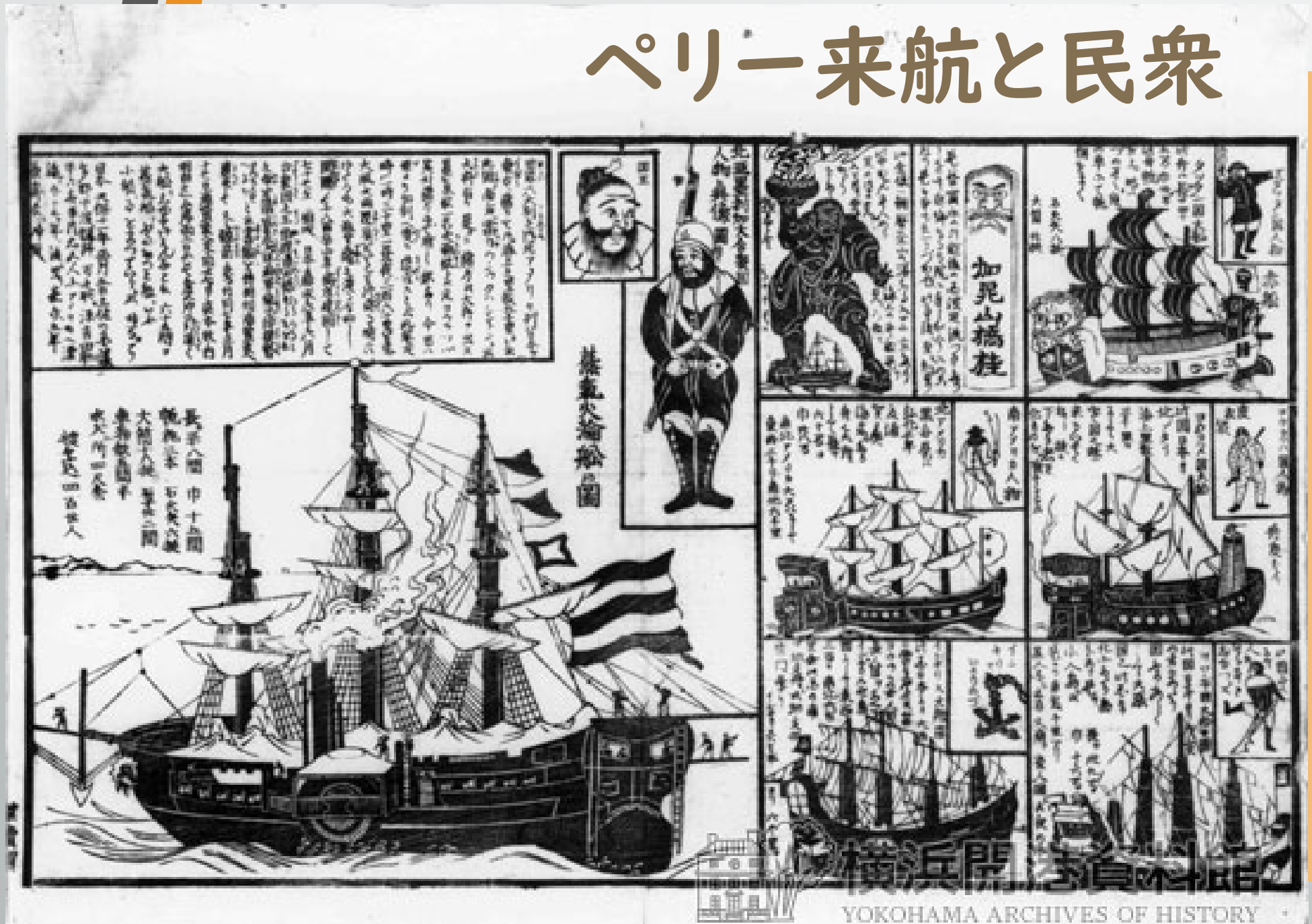
「道理」と「西洋知識」で応酬⇒最終的には「避戦」の原則

「長崎へ行け！」＝他国ではその法律に従うのが道理

積載している大砲の射程距離は？

「フィルモア大統領はお元気ですか？」

ペリー来航と民衆



異様な形の異国船がやってきたという情報はたちまち東京湾や相模湾の沿岸地帯に広がった。浦賀周辺には艦隊来港を聞きつけた人びとが各地から訪れ、「黒船」見物ブームが巻き起こった。

(西川武臣「ペリー来航」)

ペリーの久里浜上陸・国書受け取り

上陸したアメリカ人は約300人、幕府側の陣容をはるかに越えていた。（中略）
　国書の受理のみで双方の代表は沈黙、会談は一切なされなかった。
（加藤祐三『黒船異変』）

ペリーの久里浜上陸（ハイネ原画　石版画　1855年刊　横浜開港資料館蔵）本文60頁参照

ペリーの要求

①難破船の乗員の救出・保護
②石炭・食糧・水などの供給
→入港を要求
※人道問題として要求！

③ 通商要求

④他国と同列の扱いをするように（最恵国待遇）

⑤領事をおく

幕府の回答

薪水給与令※で対応可能
ただし港は限定
※燃料や飲料水・食料を無償で供給し退去させる

人道問題とは無関係と拒否

とくに異議なし！

玉虫色の決着に！

日米和親条約の基本的内容

①燃料・食料の実費での購入を認める

②下田・箱館の開港

→最恵国待遇により長崎も開港へ

③一方的最恵国待遇の明記

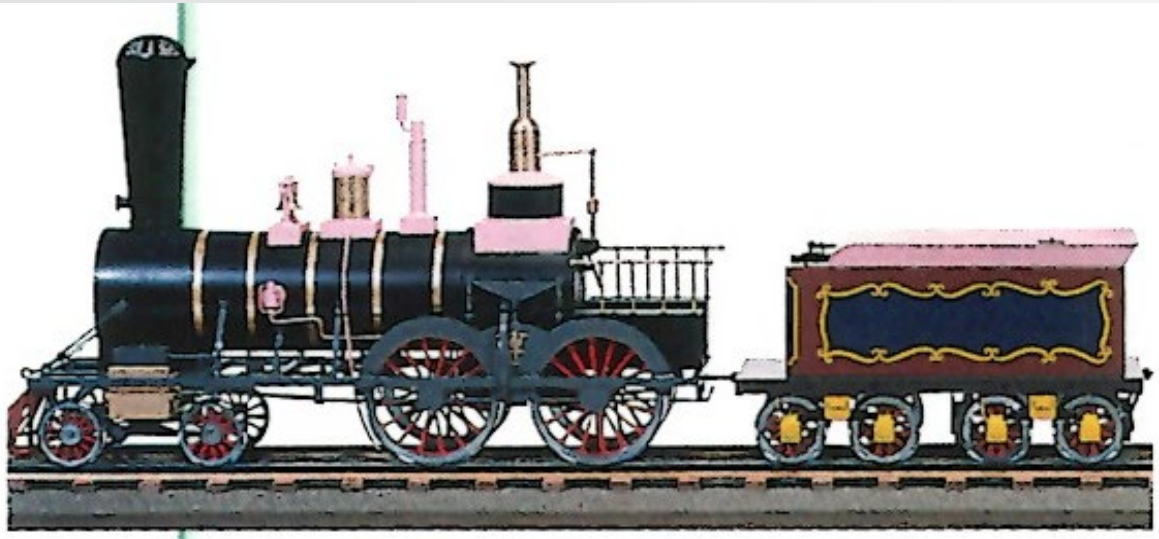
→不平等条約！

④領事の駐在

「領事を置くことができる」をどう理解するか？

締約国の一方が他方に対し、通商・関税・航海などの事項について最も有利な待遇を与えている第三国よりも不利でない待遇を与えること。

ペリーの贈り物と日本の返礼品



蒸気機関車の模型とモールス電信機

返礼品の米俵を力士に運び入れさせた

条約締結後、米艦船上での宴席

ペリー来航で見えたこと

軍事力の圧倒的な差の自覚

→「緊張感」もし、伊豆大島をアメリカが占拠したら…

→強い「屈辱感」を抱く

有効な対応ができない幕府（→実は日本自体）への不信感

→ナショナリズムの高まり（＝攘夷論）

→天皇への期待（＝尊王論）

いまの「幕藩体制」では国難に対応できないとの自覚

→オールジャパン体制の確立への要請

→国家の改造の必要も…公議政体論＝雄藩連合・・・

幕府だけ、武士だけの問題でない国民的課題との自覚

→下級武士や豪農商らの志士の活発化、「草莽崛起論」

幕末日本がもっていた「強み」

「勝てない」とのリアルな認識の存在

→事態を客観視できた

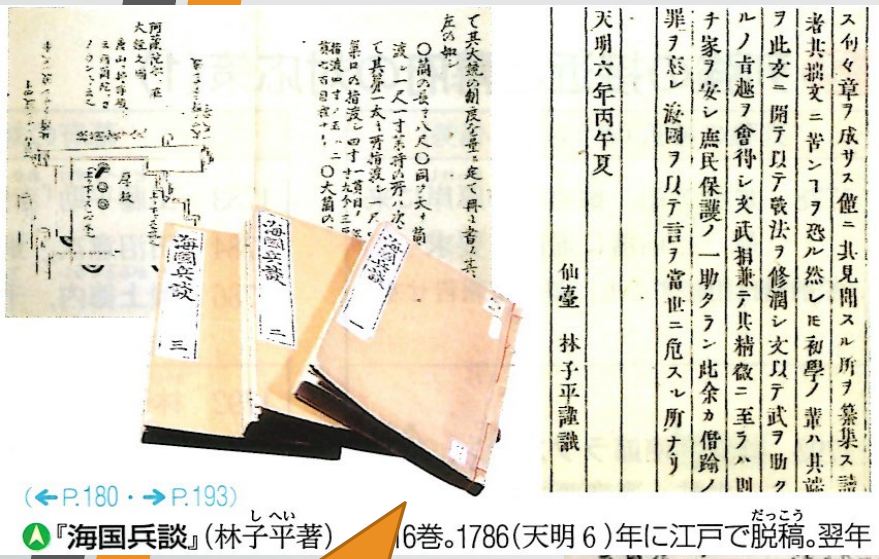
- 「日本には『長崎』があった」（姜在彦）

→蘭学・海外情報の蓄積

→国際感覚を持った官僚・知識人・当事者能力

- 情報伝達能力

→国民的課題としてうけとめる土壌の存在

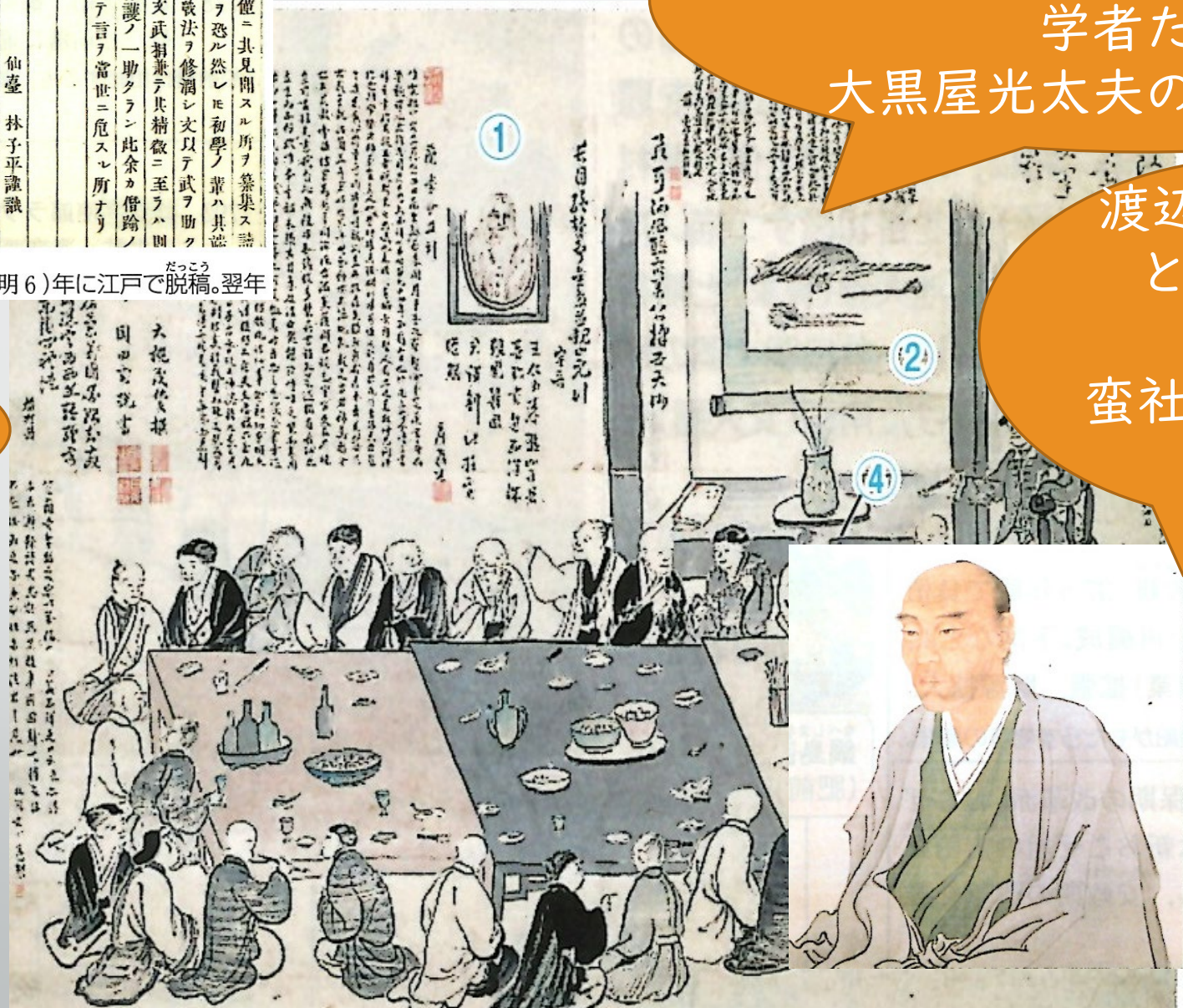


(←P.180・→P.193)

『海国兵談』(林子平著)　16巻。1786(天明６)年に江戸で脱稿。翌年

林子平
『海国兵談』

オランダ正月
（1795年元旦）を祝う蘭
学者たち
大黒屋光太夫の姿も見える



渡辺崋山(左)
と高野長英
(右)
蛮社の獄で弾圧
される

世界を知っていた幕閣たち
～アヘン戦争と幕府～

清…南京条約は皇帝がイギリスに恵んでやった恩典と理解

1825～**異国船打払令**

日本沿岸に近づく外国船に対し，無差別に砲撃を加えて撃退することを命じる

1842年7月**薪水給与令**

来航した外国船に薪水・食料を与えて、平和裡に退去させる

アヘン戦争（1840~42）アヘン禁輸を発端とする清朝とイギリスとの戦争、イギリスが圧勝し、南京条約を締結させる

情報網の整備
⇒ペリー来航を「国民」的課題として受容

ペリー来訪の情報
↓
十日後には越中・高岡の医師のもとへ

為政者だけでなく、下級武士や豪農商。知識人にも広がる

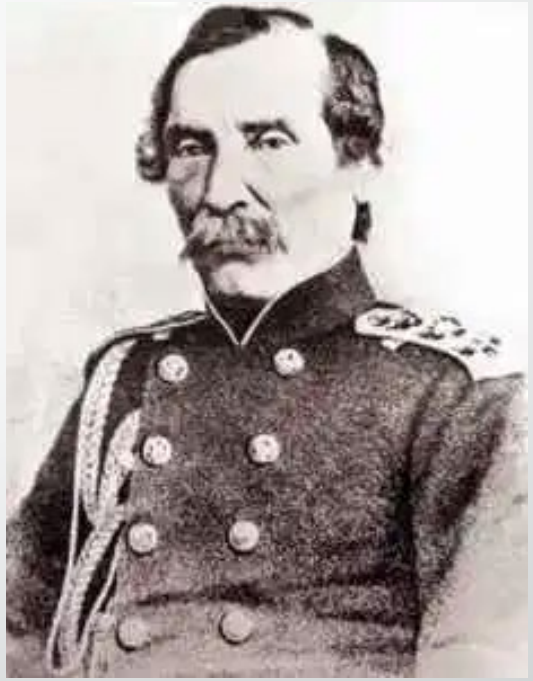
黒船の図　ペリー艦隊の旗艦サスケハナ号を描いたとみられる錦絵。タールで黒く塗られ，蒸気機関で動く外輪を備えた黒船が，煙突から煙を吐き出しながら大砲（空砲）を発射している。
（神奈川県立歴史博物館蔵）

錦絵に描かれたペリー　天狗のような顔に描かれている。
（新潟 黒船館蔵）

ロシア・プチャーチンの来訪

日本の事情を考慮し、
友好的な態度で交渉に臨む

↑シーボルトの助言



プチャーチン（1804－1883）
ロシア軍人。嘉永6年(1853) 長崎に来航。
安政元年下田で日露和親条約を締結。
下田滞在中に旗艦が津波で沈没し、戸田で代船を建造した。
安政4年再来航、5年日露修好通商条約をむすぶ。

外交交渉は怖い！川路聖謨はがんばったが。

勘定奉行
川路聖謨

結局、不要不急の物が輸入され、日本の大切な物資が輸出されるはめに陥る。

アメリカとの条約を参照にしたい。
ロシアに悪いようにはしない

貿易を開始してほしい

文字にしてください！

結局、一方的最恵国待遇を認めさせられる。

ロシアは「へっぴり腰」で交渉に・・?!

実はロシアは戦争の真っ最中。

クリミア戦争…1853年から56年にかけて、ロシアと、トルコ・イギリス・フランス・サルデーニャの連合軍との間で行われた戦争。**クリミア半島がその舞台**となった。

➡ **実はこの戦争は北太平洋でも戦われた！**

ペブロパブロフスク要塞（カムチャツカ）攻防戦
インペラートルスカヤ湾での海上戦→**ロシアの優勢**

➡ **英仏連合軍の対露前線基地は箱館！**

日本の巧みな外交～対イギリス

俺が、開国させた！

まずい

スターリング提督
(英)

ロシアとの戦争に日本の港を使いたい!

アメリカと同じ内容の条約ならいいですよ！

イギリス本国
通商条約を押しつけるつもりが変な条約を結びやがって(怒)

水野忠徳
(長崎奉行)

難航するロシアとの交渉

恐ろしい「万国公法」「先取の権」

ロシアとの国境問題＝樺太・千島・蝦夷地(北海道)

「先取の権」＝「未開の地」は、最初に宣言した文明国が領有の権利を得る。

背景としてアメリカの調査船の来訪

日本
蝦夷地は自分のものだ
→アイヌの髪型を日本風にさせる

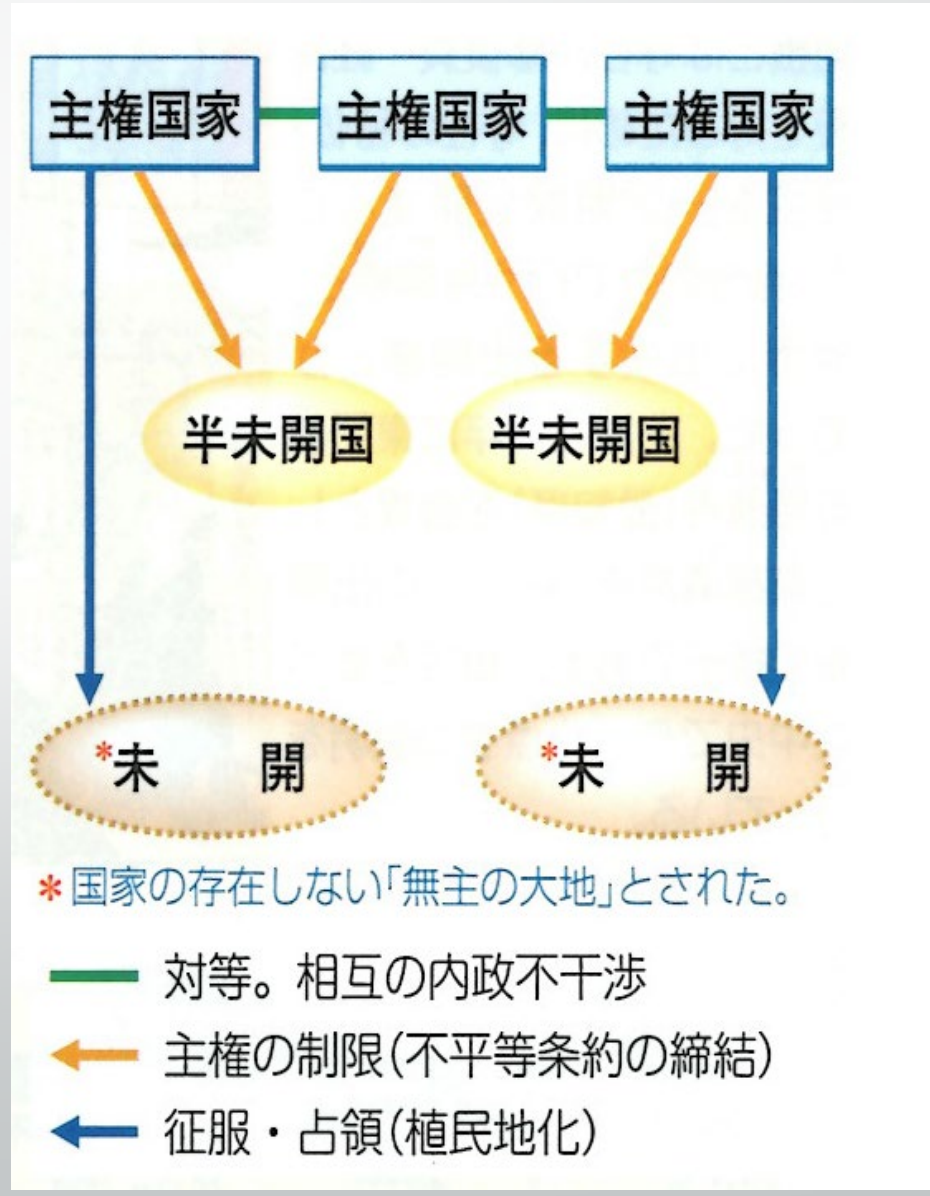
ロシア
日本人と問題を起こさずの樺太(サハリン）領有を実現せよ

樺太における日本漁民の拠点クシュンコタン郊外に基地を建設（1853～54）

欧米ルールとしての主権国家体制

主権国家（16～17世紀に成立）
①明確な国境、②国民、③他から介入を受けない統治権を持つ国家

主権国家体制（1648成立）
①対等な主権国家同士による国際秩序
　欧米キリスト教「文明」国
②生命・財産・自由を保障しうる十分の法をもたない国＝「**半未開国**」
　⇒**不平等条約**の対象
③国家の存在を認めない「**未開**」の地
　⇒「無主の地」＝**植民地**の対象



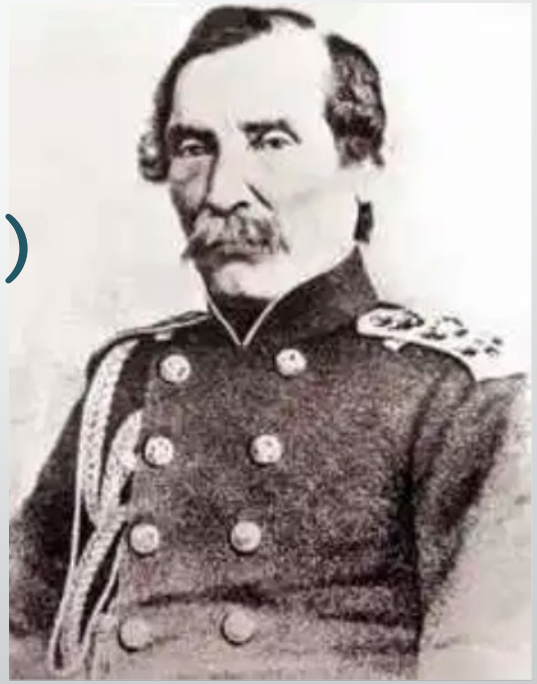
難航する対露交渉（真摯な交渉！）

神出鬼没のプチャーチン　　箱館→大坂→下田へ

国境交渉
　千島における国境はウルップ・エトロフ間
　樺太国境は当面定めない（「雑居地」とする）

国際友好…安政地震（1854）と「戸田丸」建造
　クシュンコタンのロシア軍を撤退？

双務的領事裁判権（「治外法権」はなし）



プチャーチンとヘダ丸の進水式

ロシア船が破船・沈没したため日露協力によりヘダ丸を進水させた。（1855）

日蘭和親条約

長い付き合いであったオランダとも和親条約締結

オランダ人…出島暮らしから解放される

オランダとは江戸時代を通して貿易も行っていた！

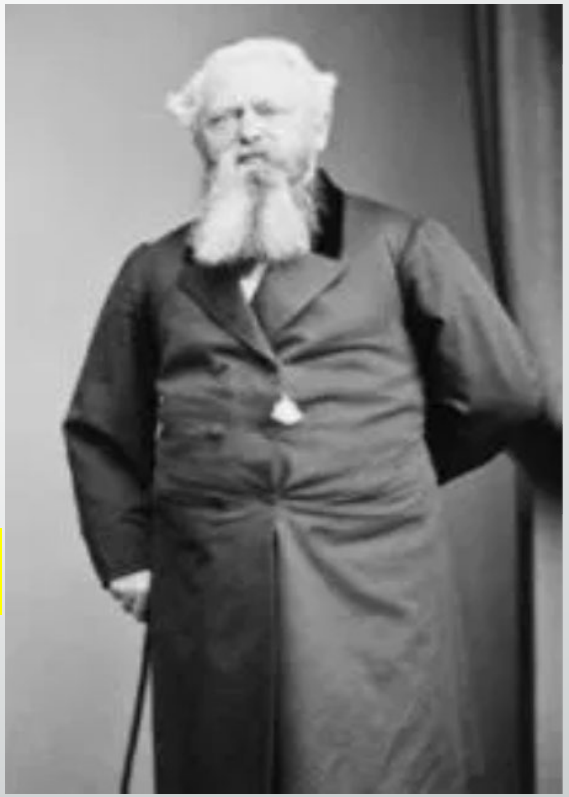
「なしくずしの貿易開始」へ

通商条約交渉と日本

神奈川横浜新開港図　横浜開港資料館蔵

アメリカ総領事ハリス

ニューヨーク州生れ。13歳から働き始め，正規には初等教育しか受けなかったが，独学で数ヵ国語を習得。1846年ニューヨーク市教育委員会委員長として，無料の高等教育機関（現，ニューヨーク市立大学）設置に貢献した。49年から貿易に従事し，インドシナ，清国方面に遠征。55年駐日総領事に任命され，56年8月（安政3年7月）下田に来航，玉泉寺を総領事館とした。57年6月下田条約（日米協定）を調印するものの幕府は通商交渉を渋り，ハリスは15ヵ月間，下田で孤立した生活を送った



ハリス
（1804-78）

ハリスの登城風景(1857.10)

ハリス…1856年８月、「駐日公使」として来日

　⇒欧米ルールに則り将軍へ信任状提出を要求

幕府…和親条約の理解の相違

　⇒「ぶらかし」策＝交渉の引き延ばしをはかる

↓

交渉は難航＝１５ヶ月に及ぶ

アメリカ総領事ハリスの大演説

日本人にばれるわけない！

タウンゼント＝ハリス
アメリカの外交官

アメリカは侵略をしたことのない平和国家。
しかしイギリスはちがう。凶暴な国。
戦争が終われば日本にやってくる。
その前に条約を結べば、有利な内容となる・・・・

大部分はウソとはったり！
しかし、イギリスへの評価は妥当
提案は受け入れるべき。

幕府・勘定奉行

開港をめぐる対立

目付・外国奉行
このさい、積極的
に開国すべし

勘定奉行
「ぶらかし策」で時
間稼ぎを

堀田正睦
（筆頭老中）

有力大名
オールジャパンで
に当たるべし！

おれたちも
いれてね！

朝廷の許可が得
られたら！

相談不足！
却下！

外人に来てほ
しくない

孝明天皇

徳川斉昭

といっても
実際、戦え
ば・・

開国は日本の伝統
に反する絶対反対

条約締結～井伊直弼と尊攘運動

イギリスがやってくる。決断を！

自分の責任で条約締結を認める！
幕府にはその権限がある！

実は尊皇家なんだけどな（泣）

しっかり相談して出直せ！

天皇への約束が守れないのか！（怒・怒）

天皇の命をまもって、外国を打ち払え！（尊王攘夷論の沸騰）

日米修好通商条約

神戸開港と大坂開市は1868年、新潟はさらに遅れる

①神奈川(横浜)、長崎、新潟、兵庫(神戸)の開港
　江戸・大坂の開市
　横浜などで貿易開始
②自由貿易（数量などの制限を設けない）
　協定関税（**関税自主権**がない）
③一方的領事裁判権（**治外法権**）

イギリス
フランス
ロシア
オランダとも
安政の五カ国条約

不平等条約ではあるけれど

領事裁判権（治外法権）を拒むことはできたのか？

→当時の日本の警察・裁判制度（拷問・自供・肉体刑・弁護人なし）を外国人に適用できるのか。

→そもそも法律が整備されていない！

治外法権を撤廃するには、法律・裁判・警察などで「文明国」が納得できるレベルのものを準備しなければならない。

不平等条約の意味

ノルマントン号事件（1886(明治19)年）

英船が難破し、英人乗組員のみ脱出　、日本人乗客などは全員死亡。

↓

英領事は全員に無罪判決をだす。

治外法権の問題事例の典型

実際のトラブルは、民事訴訟で多発

→悪徳商人の詐欺罪を裁けない（上告制を悪用）

タフ＝ネゴシエーターとしての幕府官僚

不平等条約

- 関税自主権ではなく協定関税
  しかし関税を20%とする。（中国は5%）
  →イギリスは強く反発、改訂を望む
- 「内地雑居」を断固拒否
  京都の開市、外国人の日本国内の旅行や居住の自由は認めない
  →外国商人の国内侵入＝密輸や経済構造再編を阻止する
  →外国人とのトラブル→それを口実とする介入を防ぐ

不平等条約

→その結果、小規模な植民地「居留地（「租界」）」を認める結果に！

不平等の象徴？＝関税自主権の喪失

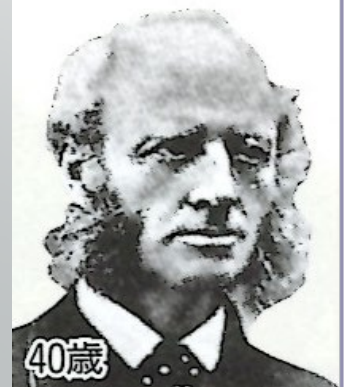
ハリスが結んだ関税率は20%だった。

輸入	無税	日本に居留のための所持品(貨幣・衣服・家財など)
	5％	船の修復などの工具や建築材・食糧など
	35％	蒸留酒・醸造酒
	20％	上記以外のすべての品
輸出	5％	日本産の輸出品（金銀貨幣・棹銅(さおどう)は無税）

横浜で生糸を見分ける外国人（半山直水筆）

改税約書(かいぜいやくしょ)　1866年調印

1866年、下関砲撃事件を利用して、関税を5%に引き下げさせた。



関税率が高すぎる！

BYイギリス

開国をめぐる最大の問題は

日本人の総意でなかった。
全体の合意の上に結ばなかったこと

「破約攘夷」論の登場

条約は、外国の力に押しきられた不当で屈辱的なもの。
勅許という手続きができていない。
いったん条約を破棄し、再交渉し、条約を結び直そう。

→明治期の「条約改正」論へ

開港を待つ世界

産業革命の進展
⇒第二次革命に向かう
新興工業国（アメリカ・ドイツなど）の登場
原料と市場を求めアジアに、世界に
植民地化の進展
時代は自由貿易時代から帝国主義時代へと向かう
（岩波文庫『ペルリ提督日本遠征記』
平尾信子『黒船前夜の出会い』など）
イギリス領
フランス領
ロシア領
オランダ領
ポルトガル領
スペイン領
ロシア
デンマーク
プロイセン
ベルギー
オランダ
オーストリア
オスマン帝国
アラスカ
カナダ
1848
金鉱発見。
翌年ゴールド＝ラッシュ
サクラメント
オレゴン
1846(米)
アメリカ
テキサス
1845(米)
カリフォルニア（アメリカ＝メキシコ戦争で1848年獲得）
メキシコ
1852.11-24発
マディラ島
52.12-12
モロッコ
マルタ
チュニジア
リビア
エジプト
アルジェリア
アラビア
ペルシア
アフガニスタン
ネパール
ブータン
清
朝鮮
日本
浦賀
上海
香港
台湾
インド
ビルマ
シャム（タイ）
フィリピン
セイロン島
53.3-10
エチオピア
ルワンダ
シンガポール
東インド
赤道
ケープタウン
53.1-24
ケープ植民地
ニュージーランド

「開港」を待つ世界 1859年ごろの世界

①18c後半～産業革命＝資本主義が世界を変える

原材料を大量に消費し、大量の工業製品を生産する世界に

→工業製品の売り場(市場）と原料の供給地を求め世界へ

→「未開」は植民地化、「半未開」には不平等条約強要

19世紀末～　農業地帯だけでなく鉱物産出地も

②海上進出のための拠点＝進出拠点の争奪戦

風待ちや待避→食料・水・石炭の供給・メンテ→軍港など

③19世紀後半

～植民地をめぐる争奪戦のプレーヤーの増加（米・独など）

植民地・勢力圏再分割競争＝帝国主義時代（20世紀）

貿易の開始＝「富は流出したのか」

貿易開始…1859年

横浜・長崎・箱館の三港

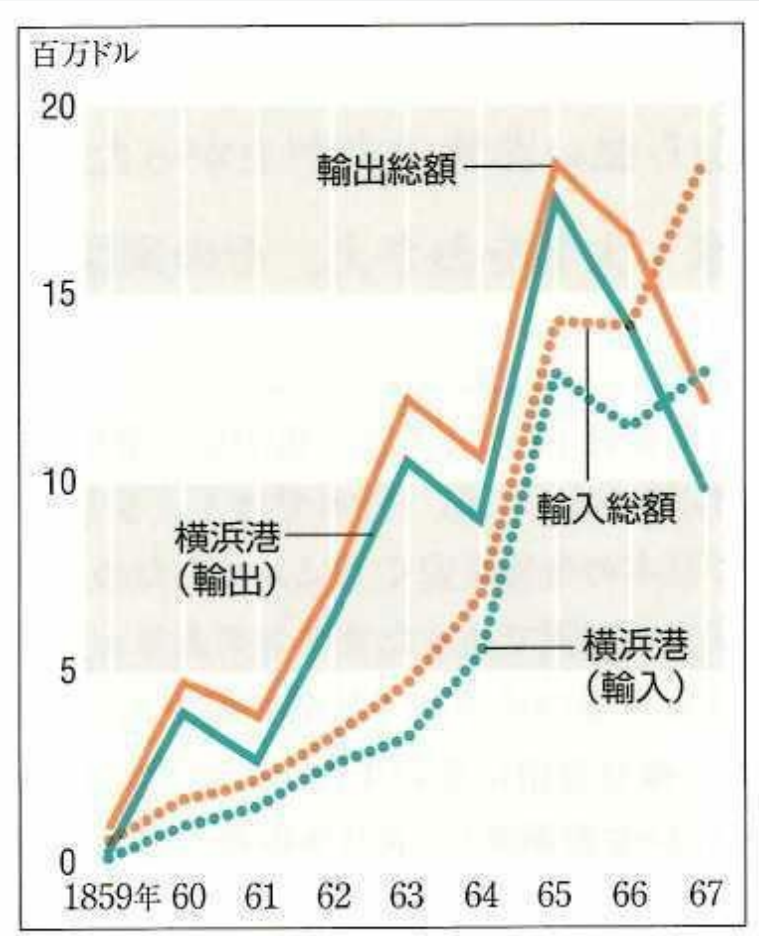
貿易（輸出・輸入）額の急速な拡大

横浜港の貿易取扱量

1867年には中国の1／5、広州と同額に

問題は売れ過ぎ＝輸出過剰による混乱

背景にある日本経済の成熟

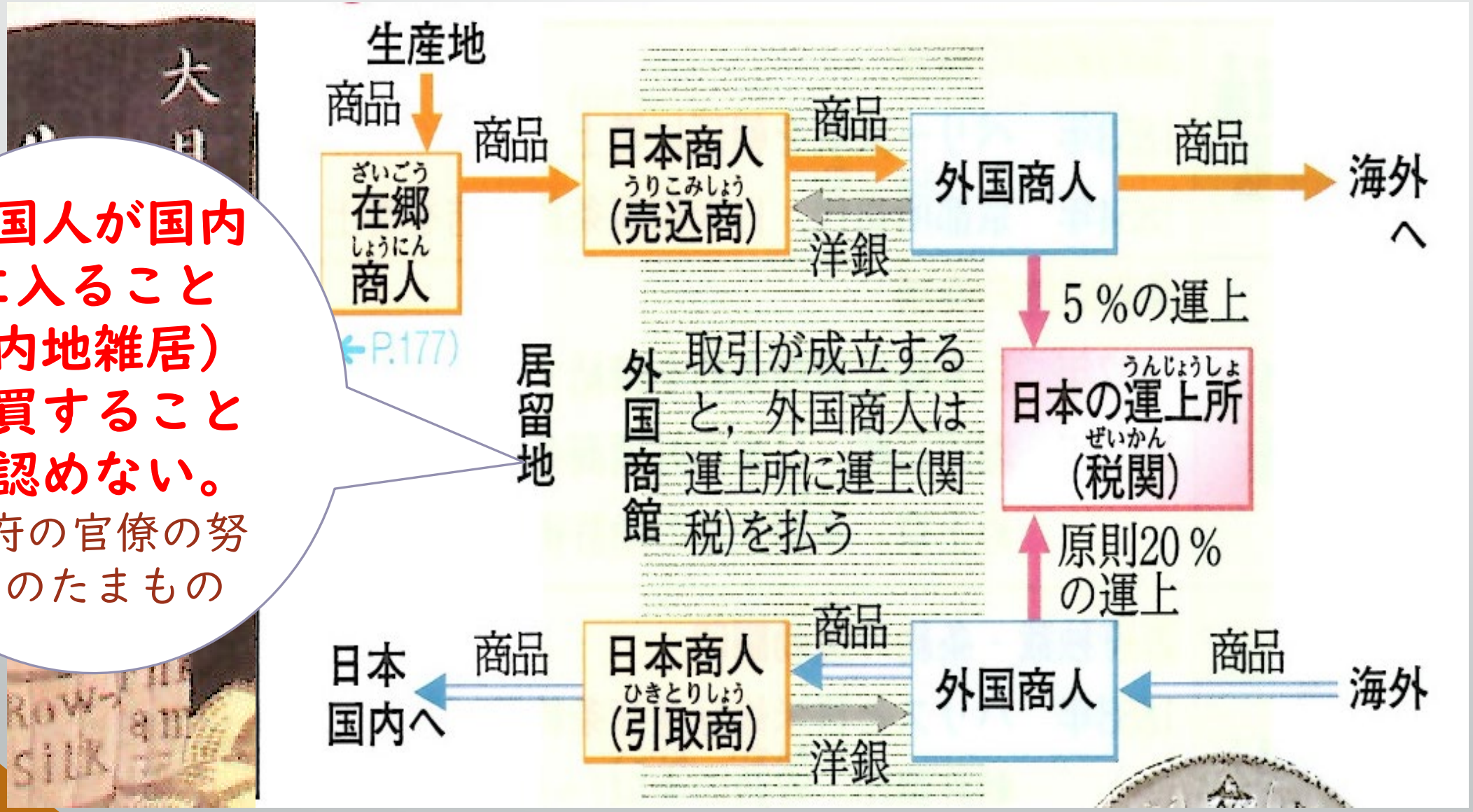


貿易の発展（『幕末貿易史の研究』より）

横浜居留地の繁栄

開国が変えた日本経済＝居留地貿易のしくみ

外国人が国内に入ること（内地雑居）売買することを認めない。
幕府の官僚の努力のたまもの



貿易が変えた経済構造

売込商が横浜に殺到

生糸需要の高さ

→養蚕地域の在郷商人が横浜に

↓

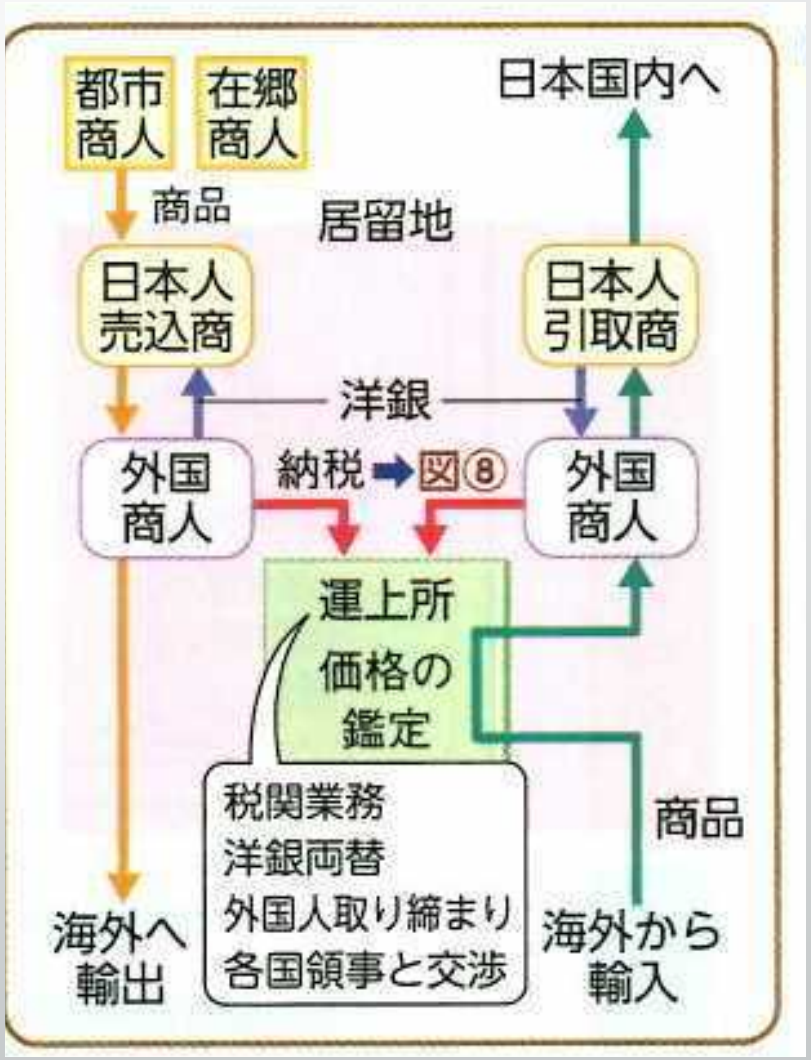
横浜貿易に対応した経済構造に

・江戸・大坂を経由しない物流

・製糸業などの工場制手工業

↓

経済法則に従い、貿易に対応した経済構造に



経済構造～流通・生産の大混乱

- 商品流通の大変動…江戸・大坂中心→横浜中心に
  →幕府＝江戸大坂商人による流通の掌握が困難に
    →1860年「五品江戸廻送令」＝生糸などを江戸に
      →外国側の反発をうけ挫折

- 関東地方西部での生糸増産→それ以上の輸出増
  →工場制手工業(マニファクチュア）の定着
  →生糸の不足と価格急騰
  →国内の織物業・染色業への打撃・京都などの不振

金銀比価問題

金銀は「同種同量」で交換

金：銀⇒日本は1：5　世界は1：15

横浜・香港1往復で三倍の儲けに

↓

大量の金流出が発生

↓

幕府：万延小判の大量発行

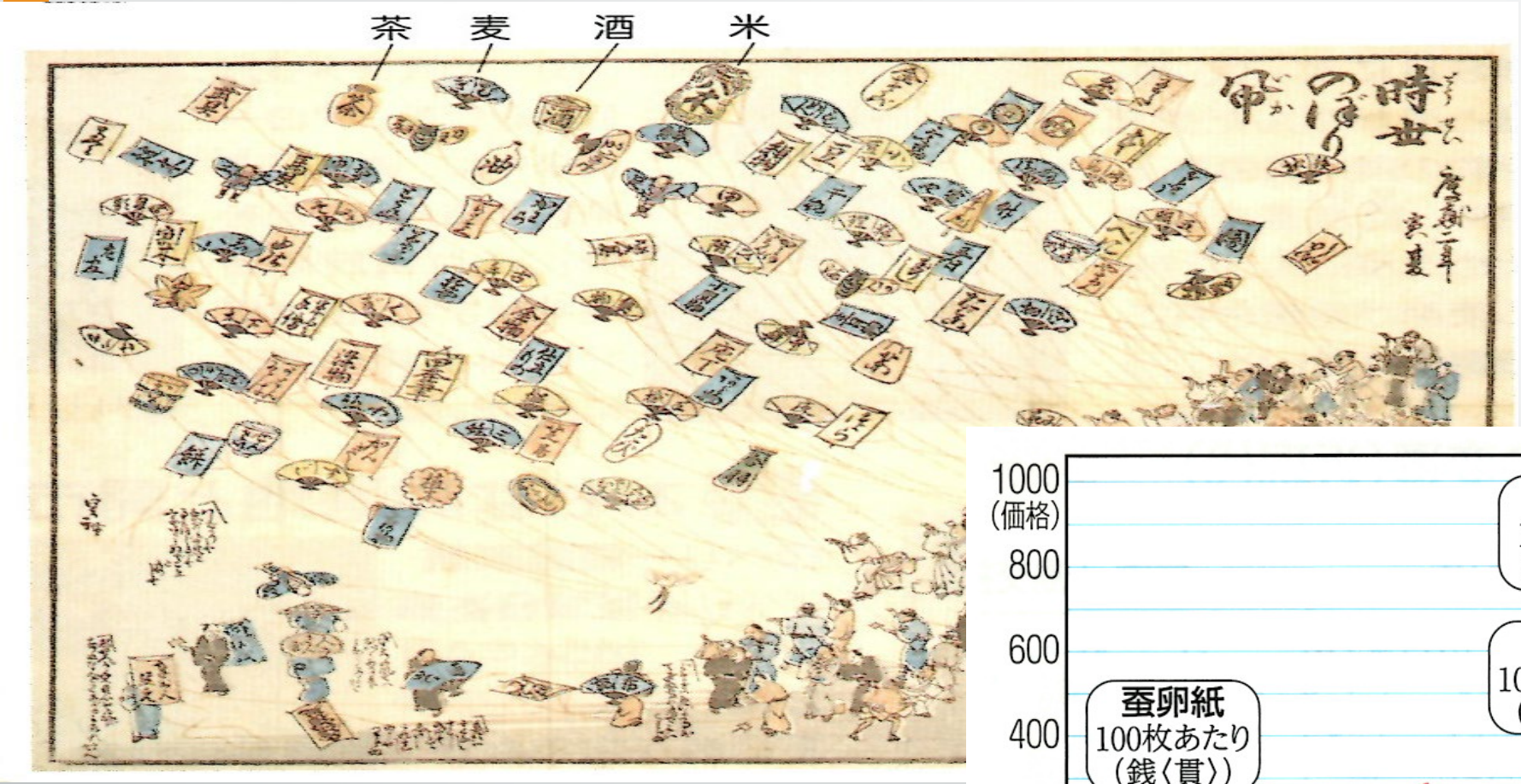
＝金含有率は1/3

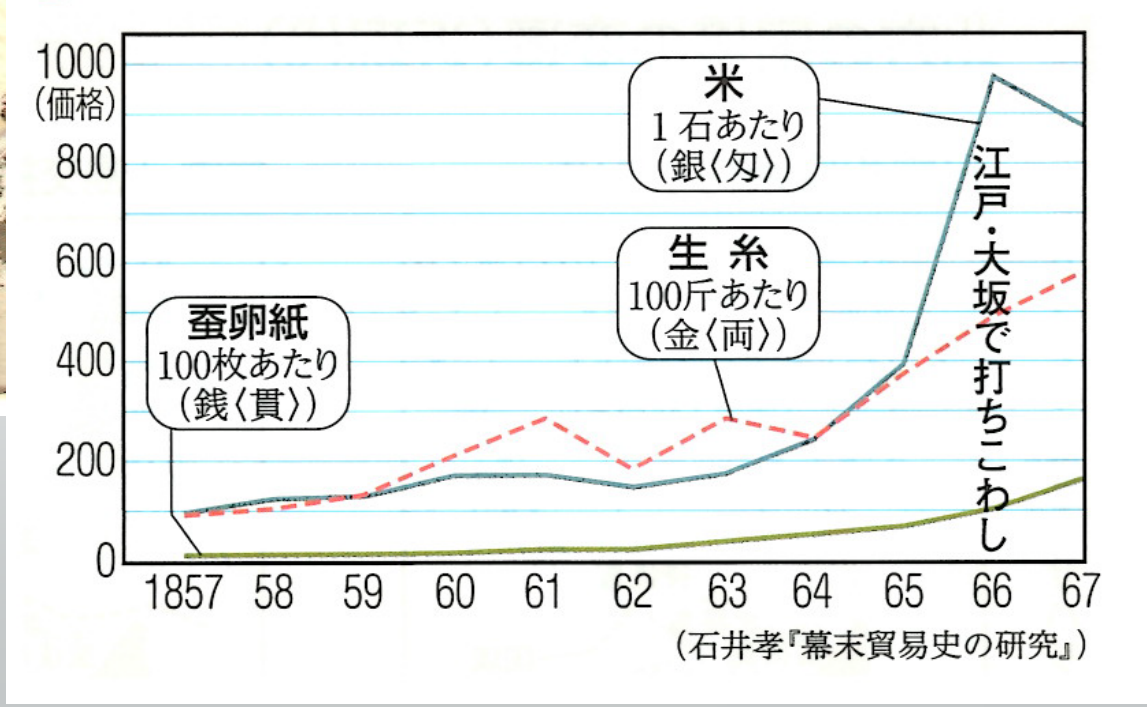
↓

幕府収益増と強烈なインフレ

→消費者とくに武士の生活を直撃＝不満の高まり

物価高騰＝消費者の生活を直撃





幕末の貿易構造(1865)

＜輸出品＞

絹にかかわる商品が圧倒的。

生糸約８０％、蚕卵紙３％

背景：フランスで蚕も流行病が発生

＜輸入品＞

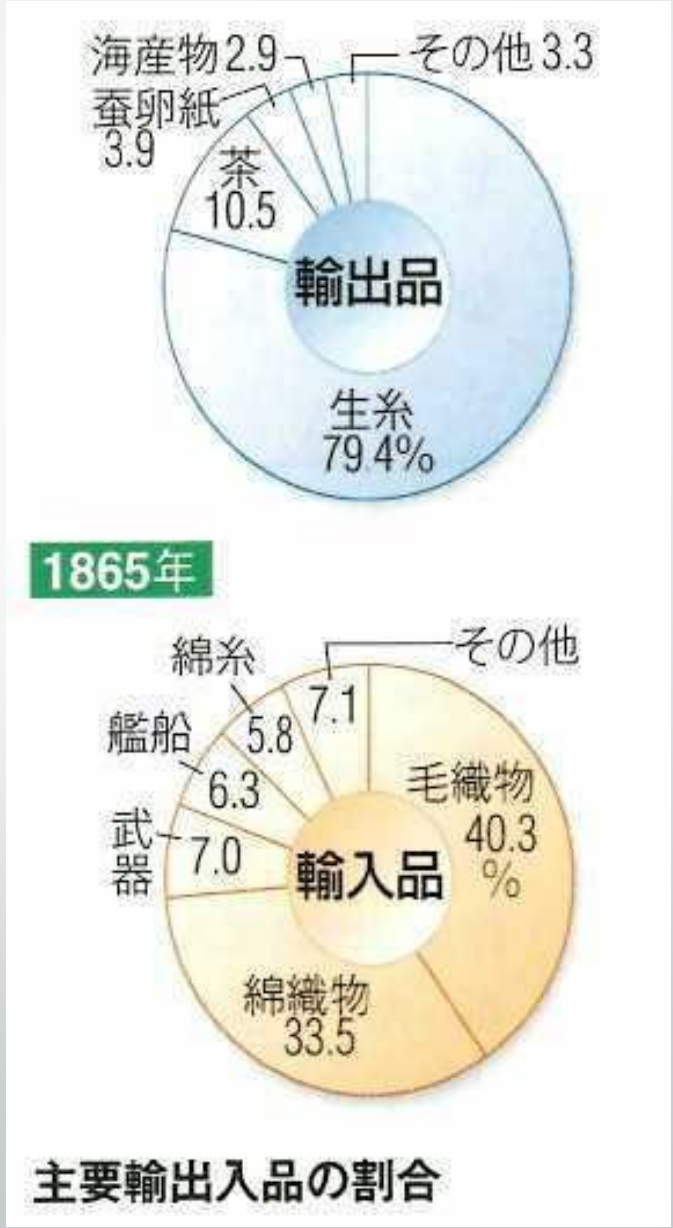
イギリスがもっとも売りたい工業製品中心

１位が毛織物、２位綿織物、５位に綿糸

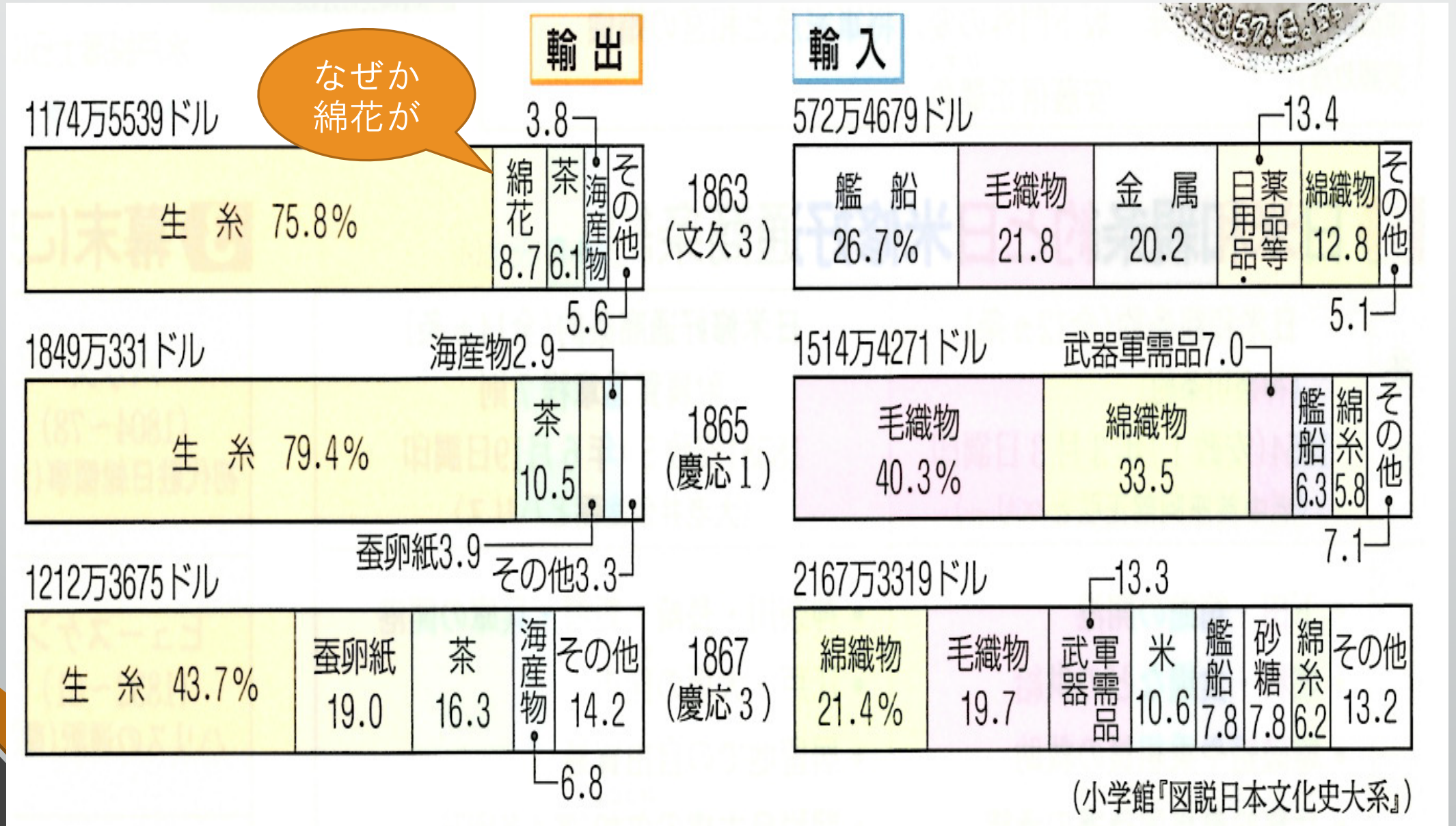
→国際産業への影響大

３位４位は武器・艦船

背景：幕末の政治情勢



幕末の主要貿易品の割合



（小学館『図説日本文化史大系』）

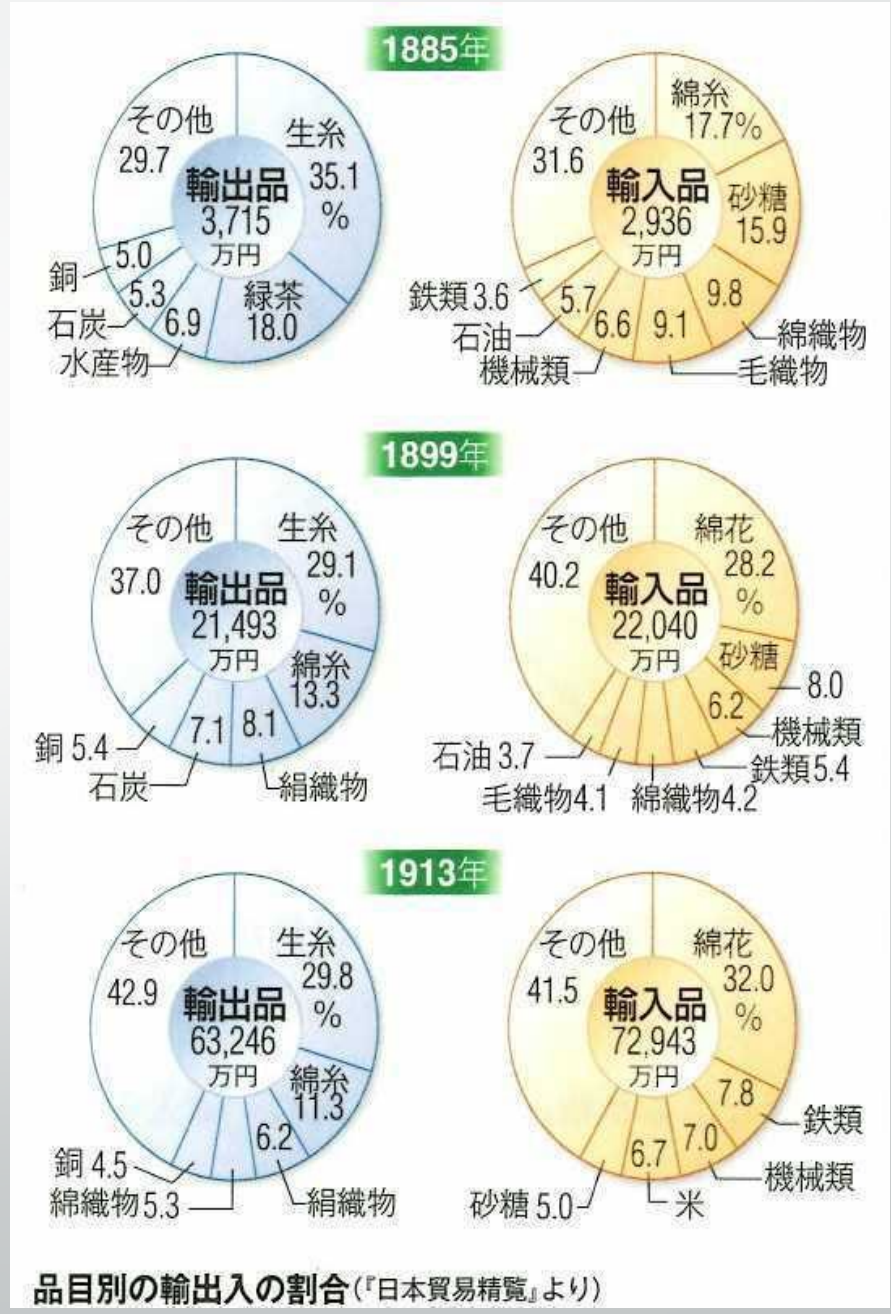
貿易は日本をどう変えたのか
～綿業を例に～

①1865…**綿織物輸入**の増加
　価格差が出発点、木綿産業全体に影響
　色や織り方から頭打ちに

②1885…織物業の努力
　縦糸を日本産、横糸をイギリス産に
　　→**綿糸の輸入拡大**

③1899…世界最新鋭の紡績工場
　　→**綿糸の大量生産・輸出開始**
　　→**綿花、輸入の一位に**

④1913…**綿織物生産増加・輸出に**
　綿工業発展に伴う**綿花輸入の増加**
　機械の自給は困難・輸入頼り



品目別の輸出入の割合（『日本貿易精覧』より）

貿易は日本経済をどう変えたのか

全体として

①軽工業（繊維）製品…輸入から輸出へ
②輸出…つねに生糸中心、さらに工業原料の輸入も増加
　　背景にある工業化に対する日本の努力
③重工業製品は輸入中心のまま変わらず。

④最先端農業・綿花や菜種栽培の崩壊・消滅
　　背景：高コスト・低品質
　　ただし、南北戦争中は綿花も輸出！

植民地化の危機はあったのか？

植民地化の危機⓪

経済面では「植民地」の危機は小さい！

日本…経済法則がうまく機能＝世界資本に都合のよい経済構造に変化していく。

インド…イギリスが植民地化し、農場を経営し、
鉄道や港湾などのインフラを整備した

中　国…戦争で開港場を増加させ、旅行権を獲得し、直接
買付や買弁を利用し流通網の未整備や障害に対応

日　本…横浜にいけば儲かると考える人がすでに存在した！
欧米人が介入しなくとも自然に売買が伸びていく
→輸出向けの産業が発展、輸入品の購入も順調に

※しかし、それは流通の大混乱であり、
経済構造の大変動でもある

植民地化の危機①ロシアの対馬占拠事件

1861年2月…ロシア船、対馬・芋崎の海軍基地化のため土地租借を要求。住民に死者も

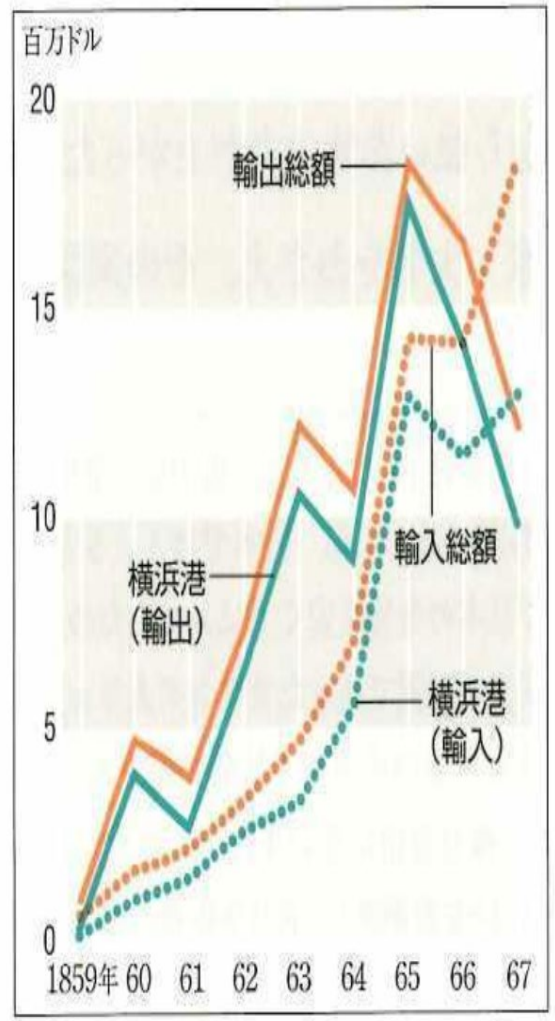
→対馬藩…幕府の直轄化と転封を要望、藩内の反発

→イギリス軍艦の圧力とロシア政府の命令で退去

- ロシア…国内政策の不一致、
  海軍は朝鮮海峡に基地をもとめつづける
- イギリス…ロシア封じ込め政策を第一に

植民地化の危機②　幕府の横浜鎖港

原則：①貿易が好調なときは余計な手出しは不要
→しかし、貿易を制限しようとすると怖い！
1864　横浜鎖港方針・五品江戸廻送令強化
②外国人の生命・安全が脅かされたとき
1862生麦事件、63長州藩の外国船への砲撃
(③1868 江戸城総攻撃?!)
対策：限定的な軍事力行使
→イギリスなどの制裁発動?!
1863 薩英戦争　1864「下関砲撃事件」
1865 外国艦隊の「大坂湾侵入」
→改税約書・条約勅許の強要
※イギリスの「彦島領有計画」
…伊藤博文の「与太話」か



貿易の発展(『幕末貿易史の研究』より)

おわりに

～開国が奪い去った「日本」～

私にとって重要なのは在りし日のこの国の文明が、人間の生存をできる限り気持ちのよいものにしようとする合意と、それにもとづく工夫によってなり立っていたという事実だ。…それは情愛の深い社会であった。
真率な感情を無邪気に、しかも礼節とデリカシーを保ちながら伝え合うことのできる社会だった。当時の人びとに幸福と満足の表情が現れていたのは、故なきことではなかったのである。

（渡辺京二『逝きし世の面影』）

開国が引き起こした政治不安の意味

安丸良夫「1850～70年代の日本」より

幕藩制国家は、＜敵＞を排除しその内部をひとつの＜平和領域＞として構成し、そこに安穏と秩序とを実現していることに正統性根拠をおいていた。

ペリー来航によって外なる＜敵＞に有効に対処しえないことが暴露されると、その権威はたちまち動揺し、権力として実効ある支配を実現しえなくなった。

その後の歴史は、この動揺から解体への過程がいっそう深まって、人びとが求め受容する正統性根拠と、権力をめぐる現実状況との間に、大きな懸隔が生まれ、あらたな権力の樹立へと歩むジグザグの過程として把握しえよう。